

山口大学医学部&附属病院から笑顔と情報を発信!

山/大/医/学/部

Yamaguchi University Faculty of Medicine and Health Sciences / Yamaguchi University Hospital

病/院/だ/よ/り

1

2024

Vol.263

山口大学医学部医学科白衣着衣式



白衣着衣式





山口大学医学部長
篠田 晃

新年明けましておめでとうございます。今年のお正月はいかががお過ごしになりましたか。コロナ禍で習慣化したマスク着用・手洗いの緩みや出張や旅行・集会参加や会食の増加もあり、今なおコロナ感染症の散発的クラストが散見されますが、ひと頃の様なコロナ狂想曲は終息に近づき、漸く日常生活に活気が戻り始めたことは喜ばしいことだと思っております。一方、元旦に起こった「令和6年能登半島地震」は、震度7を記録し、津波や火災の発生、交通網の寸断も相まって、住民生活や公共機関に甚大な被害が及んでいます。また能登半島・北陸日本海沿岸部の医療施設や医療関係者の方々には、年始早々から大変なご苦労をなされていることと心配しております。被災された皆様に心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。

山口大学医学部や県内医療に目を向けると医師を含めアカデミア人材の確保という長年にわたる課題があります。昨年、①卒後に県外や都心部に出てしま

った医師・医学者、②産休・育休・その他の理由で大学を中途で離れた医学部同窓生、③自治医大など他大学卒業後に県内で貢献している医師・医学者を対象に、絆強化を促してアカデミアや県内医療に回帰しやすいよう「M-MARC (Midlife Medical Academia Recurrence Center)」を新たに設置しました。人生の中間地点で自己実現の道に迷い、挑戦を逡巡しつつ思い悩む世代の医師に対し、相談ファシリテーターを配置し、医学・医療を俯瞰した視点で、ニューtralな立場から彼らに寄り添い自己実現をサポートできればと思っております。また、昨年末には山口東京理科大学薬学部と多職種連携教育プログラムを共有する協定を結びました。医師・薬剤師・看護師・臨床検査技師のチーム医療を強化し、学部学生時代から互いの役割と責務を意識してリスペクトし合える関係を構築することを目的としています。

2024年の干支は「甲辰」。「甲」は「陰陽五行思想」で木の兄（陽）で急成長・発展・春の象徴です。「辰」は本来「蜃」に通じ「蛤が足のように唇を出して振動しながら殻を破って立つ状態」を指します。干支に「十二獣」が当てられたのは秦代で、「辰」は「立ち登る龍」と対応し、天に飛翔する意味が加わったようです。今年が、今までの努力が認められ、殻を破って発展し、一気に開花し輝ける年となることを祈念いたします。

医学部 NEWS

令和5年度 医学部医学科白衣着衣式挙行

令和6年1月9日（火）、講義棟C第3講義室において、令和5年度医学部医学科白衣着衣式を執り行いました。

本式典は医学生共用試験に合格した4年生に医学生としての決意と自覚を促すことを目的に毎年実施しているものです。

はじめに篠田晃医学部長の訓辞があり、医学でも医療でも周りの人たちの心を動かすような仕事を期待していると話されました。続いて112名の学生の代表として、吉村美賀子さんが医学生共用試験合格証および臨床実習生（医学）証を授与されました。

福田進太郎霜仁会会長の挨拶のあと、同会から授与された白衣を学生全員が着衣しました。吉村美賀子さんからは式典開催に対する謝辞と、白衣に袖を通すことで改めて医学を志す者としての自覚を持つとともに、自らの生涯を医学の発展と人類への奉仕に捧げることを誓う旨の宣誓がありました。

医学部附属病院の松永和人病院長からは①頑張りぬいた自分をほめる②初心を思い返し、理想の医師像をもう一度考えてみる③



両親に感謝を伝えるといった3つの言葉が贈られ、期待を込めた挨拶が述べられました。

医学科4年生は1月から同院において、指導医の下、臨床実習を行います。



山口大学医学部附属病院長

松永 和人

謹んで新春のお慶びを申し上げます。旧年中は大変お世話になり誠にありがとうございました。今年は辰年ですが、辰は十二支の中で最も縁起の良い干支と言われており、様々な願いを叶えてくれるだけでなく、あらゆる物事を良い方向へ導いてくれる力があるとされています。本年も変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

さて、新年のスタートに際して、あらためて本院の理念を述べさせていただきます。「一人ひとりの健康と安心の探求と実現」です。この理念に沿った基本方針として、診療・看護、病院職員、学生、若手医療人、研究開発、地域医療における私たちの責任と使命が示されています。職員は一丸となり、理念の実現を目指して取り組んでまいります。

新型コロナウイルス感染症は無くなったわけではありませんが、感染症法の分類では「5類相当」へと引き下げられました。世の中の雰囲気も一気に解放感にあふれ、世界全体が躍動し始めていることを実感させられます。コロナ禍で諦め

ざるを得なかった夢に挑戦できる機会がようやく訪れたことは大変喜ばしいことですが、病院においては、適切な感染対策を継続し、警戒を怠ることなく日常診療を継続してまいります。私たちの目に見えないウイルスを相手に、感染を100%防ぐことは大変難しいことですので、多々ご負担をおかけしていることかと存じますが、ご理解をいただきますようお願いいたします。

また、本院では、2015年から病院再開発整備事業を進めています。2019年には新病棟が開院し、診療機能がさらに充実しました。本年3月には病棟の整備が終わり、2025年度末までに外来棟の工事も完了予定です。再開発整備事業による病院機能の強化は、今後も持続的かつ強靱な体制で医療を提供する礎となります。診療を行いながら再開発を進めており、もうしばらくご不便をおかけいたしますが、どうぞご協力のほどお願い申し上げます。

最後になりましたが、今年が皆様にとって心穏やかな素晴らしい一年になりますことをお祈り申し上げます。本年も山口大学医学部附属病院をよろしくお願ひ申し上げます。

病院NEWS

山口県立総合医療センターと連携協定書を締結

このたび、地方独立行政法人山口県立病院機構山口県立総合医療センターと山口大学医学部附属病院は、医療を支える多職種の人材を確保・育成・教育する体制をより一層充実させ、地域医療の発展に寄与することを目的に、連携に関する協定書を締結しました。

12月13日(水)、本院A棟1階オーデトリウムで行われた締結式では、山口県健康福祉部の佐藤始理事が立会人となり、山口県立総合医療センターの武藤正彦病院長と、本院の松永和人病院長が協定書への署名を行いました。また、山口県立総合医療センターから、地域医療振興に活用する目的で寄附の贈呈があり、木村和博副病院長から感謝状の贈呈がありました。

松永病院長からは、「日々変化する現在の医療において、技術や知識の“学び直し”を図るとともに、今回の連携を機に両病院の研修・教育面での連携を強化したい」との挨拶がありました。



連携協定書に各々署名をし、連携強化を約束

IBDセンターを設置 (炎症性腸疾患センター)

診療科の枠を越え、横断的な治療を提供する

このたび当院に「IBDセンター(炎症性腸疾患センター)」を設置しました。同センターは潰瘍性大腸炎、クローン

病に代表されるIBD (Inflammatory Bowel Disease / 炎症性腸疾患) 全般を診療するセンターとして、内科・外科・小児科・放射線科等の診療科の枠を越え、綿密な治療計画を立案し、治療を進めます。

また、同センターには放射線部、看護部、薬剤部、栄養治療部、検査部、超音波センター、ME機器管理センター、患者支援センターも含まれており、患者さんの検査・治療・通院をサポートいたします。



光学医療診療部が移転リニューアル

光学医療診療部がB棟2階に移転リニューアルしました。光学医療診療部とは、内視鏡を利用した診断と低侵襲治療を行う部門です。具体的には食道・胃・十二指腸・小腸・大腸までの全消化管と肝臓・胆嚢・胆管・膵臓の疾患に対する治療を行っています。

早期がんの診断には画像強調内視鏡検査や拡大内視鏡検査、超音波内視鏡検査などを駆使し、正確な診断に努めています。サイズの大きな腫瘍に対しても内視鏡的粘膜炎下層剥離術を行うことで、外科的切除を回避できる可能性があります。IBDセンターとも連携し、内視鏡による正確な病態評価を行っています。



Q. 症状が改善され、自己判断で服薬を止めるとどうなりますか。

自己判断で薬を止めてしまうと症状が再燃します。とくにクローン病の場合は、それがもとで手術することになってしまったり、潰瘍性大腸炎の場合も入院することになる可能性もあるので、症状が改善されたからといって自己判断で治療をストップしないことが大切です。

Q. 寛解を目指すために気を付けることはありますか。

一番大事なことは通院をきちんと続けることです。そして、休憩や睡眠をしっかり取ること。クローン病の方は食事でも気を付けて、油とタンパク質を取りすぎないようにしていただきたいです。

Q. 医療費の助成はありますか。

はい、潰瘍性大腸炎、クローン病ともに指定難病で医療費助成の対象になっています。これについては患者支援センターでご相談いただけますので、ぜひご利用ください。

Q. クローン病とはどんな病気ですか。

潰瘍性大腸炎と同じく原因が分かっていませんが、口から肛門までのすべての消化管で、ただれや潰瘍などの炎症が発生する可能性がある病気です。粘膜の炎症だけでなく、消化管の壁全体に炎症が起こることもあります。なかでも小腸や大腸で発症しやすく、下痢や腹痛、発熱、倦怠感などの症状が現れます。主に若年層に多く、その中でも日本では男性に多いです。

Q. どのような検査をしますか。

血液検査や便培養検査、上部・小腸・大腸内視鏡検査など複数の検査を行い、総合的に判断します。

Q. 治療について教えてください。

潰瘍性大腸炎、クローン病ともに免疫を抑制する薬を使った治療が中心です。また、潰瘍性大腸炎は病態が落ち着いていれば食事療法は必要ありませんが、腸内環境の影響を受けやすいクローン病については食事療法も非常に重要になってきます。病気そのものを治すというより、症状が出ないよう“寛解”を目指すのが治療の目標になります。

教えて、先生!



IBDセンター(炎症性腸疾患センター) 副センター長 橋本真一准教授

炎症性腸疾患の代表として挙げられる「潰瘍性大腸炎」と「クローン病」について、橋本真一副センター長に聞きました。

Q. 潰瘍性大腸炎とはどんな病気ですか。

欧米人に多いといわれる病気で、大腸の粘膜に炎症が起こり、下痢や腹痛、発熱、血便などの症状が現れる病気です。原因不明とされる病気ですが、遺伝や食生活の変化などの要因が重なって発症するのではないかと考えられています。現在は日本でも患者さんが増えています。



病院で受ける治療には放射線を使うものがありますが、どのような治療なのか、血管内治療(IVR)放射線診断治療センターの田中秀和教授に聞きました。



血管内治療(IVR)放射線診断治療センター 田中秀和教授

医療のいろは

病院だより10月号 続編
放射線治療のはなし

Q. どのような病気の場合に放射線治療を行いますか。

すべての悪性腫瘍に対して適応があります。メスを使わず、体の腫瘍がある部位に放射線を照射して腫瘍を縮小・消失させる治療です。臓器を切除するわけではないため、治療後も臓器の機能が残る可能性のあることが特徴です。腫瘍が良性であっても症状がある場合には適応となることがあります。

Q. 治療の頻度は。

放射線治療は基本的に毎日実施しますので、例えば30回の放射線治療であれば、平日の実施で週5回、治療期間はおよそ1カ月半になります。

Q. 本院ならではの特長はありますか。

呼吸運動に連動して移動する、肺などにできた腫瘍に対し、特定の位置に腫瘍が来た場合のみ放射線を照射する「動体追跡照射(迎撃)」を行っています。また、県内の医療機関でこれができるのは当院のみです。また、移動する腫瘍に対して追跡しながら治療ビームを照射する「動体追跡照射(追尾)」も新規に導入しましたので、今後はこちらも対応していく予定です。

令和5年

10月7日(土) 「UBE株式会社プレゼンツふれあいコンサート」を開催

本院A棟で「日本フィルハーモニー交響楽団のメンバーによるUBE株式会社プレゼンツふれあいコンサート」が開催されました。コロナ禍で開催の見送りが続いていましたが、4年ぶりの開催でした。

これは、UBE株式会社のご厚意により、日本フィルハーモニー交響楽団のご協力を得て行っているものです。松永病院長の挨拶で開演し、ヴァイオリンの佐藤駿一郎さん、松川葉月さん、ヴィオラの



中川裕美子さん、チェロの石崎美雨さんによる弦楽四重奏で、モーツァルト『ディベルメント第137番より《第2楽章》』、ハイドン『弦楽四重奏曲第62番「皇帝より」《第2楽章》』などを演奏されました。アンコールでも『ふるさと』、『川の流れのように』など



3曲を披露されました。

入院患者さんや職員約100人が美しい音色に耳を傾け、静かに聴き入っていました。

令和5年

10月12日(木) 山口パッツファイブの選手が小児科病棟を訪問



プロバスケットチーム山口パッツファイブの選手が、入院中の子どもたちを元気づけたいと小児科病棟を訪問しました。同チームの上松大輝選手と田中幸之介選手の2名が、プレイルームで6名の子どもたちと一緒にミニバスケットをしました。子どもたちの投げたボールがゴールポストに入るたびに大歓声が上がリ、笑顔があふれる時間となりました。

選手たちは「治療をがんばる皆さんに良い影響を与えられるよう、僕たちも試合をがんばります。応援しています」と、子どもたちにエールを送りました。



令和5年

10月21日(土) 市民公開講座『だれもが孤立しない地域づくり』を開催



本院A棟で本学と宇部市の共催による市民公開講座『だれもが孤立しない地域づくり ～ひきこもり支援 生きづらさを抱えた人の心に寄り添う～』を開催しました。医学部社会連携講座SDS支援システム開発講座の山根俊恵教授の講演では、市を中心とした支援体制や市から委託を受けNPO法人ふらっとコミュニティが開発している伴走型ひきこもり支援の活動内容について話されました。SDS支援システム開発講座ではSDSサポーターの養成にも力を入れており、ひきこもり支援にご協力くださる方の参加を募集しています。詳しくはホームページをご確認ください。



ホームページ

Topics トピックス

令和5年

11月13日 中学生にがんについての基礎知識を伝える講演を実施

山陽小野田市立高千帆中学校において、本院の腫瘍センター副センター長の井岡達也准教授による講演『がんについての基礎知識 ～正しい知識と行動で自分を守ろう～』が行われました。これは山口県教育庁学校安全・体育課の主催によるもので、学校におけるがん教育推進事業の一環として実施され、2年生約140名ががんについての基礎知識を学びました。

「がんは特別な病気ではなく、誰もがなりうる病気であるが遺伝性はない」、「統計上では日本人の2人に1人ががんになっている」、「年齢が上がるにつれてがんになる割合が増えている」、「がん検診は受けておくほうが安心である」ことなど、時に井岡准教授の体験を交えながら分かりやすく説明されました。

生徒たちは時々メモをとりながら、熱心に話を聞いていました。



令和5年

11月24日(金)・25日(土) 卒後臨床研修指導医養成講習会



ANAクラウンプラザホテル宇部において、卒後臨床研修指導医養成講習会を実施しました。これは、卒後臨床研修やプライマリ・ケアの指導方法についての認識を共有し、カリキュラムの作成やその評価などの効果的な研修を実施するための指導法を養成することを目的としたものです。

本会は、臨床経験が3年以上の本院医師や、本学卒後臨床研修プログラム協力病院などの勤務医を対象に行われました。福山大学生命工学部生命栄養科学科の田中新一郎教授による特別講演やグループワークを通じ、研修医の指導に役立つスキルを学ぶ充実した2日間でした。

令和5年

12月2日(土) 第6回 多階層システム医学シンポジウムを開催

医学部医館において、大学院医学系研究科主催第6回多階層システム医学シンポジウム「人工知能・システム医学による難治性疾患への新たな挑戦」を開催しました。

大学院医学系研究科システムバイオインフォマティクス講座および本院のAIシステム医学・医療研究教育センター(AISMEC)では、AI技術とシステムバイオロジーを基礎医学と実践的な医療に導入することを目的に研究を進めており、難治性疾患の発症機序、病態の解明と診断、さらに治療法の開発につなげるべく、2017年から毎年シンポジウムを開催しています。

当日はスイスのローザンヌ大学より Alessandro E.P. Villa 教授を招き、「Effect of emotion and personality on deviation from purely rational decision making: from brain imaging to neural dynamics」の演題で講演がありました。

また、弘前大学大学院医学研究科医療データ解析学講座の玉田嘉紀教授による「弘前大学COI-NEXTにおける健康ビッグデータ超多項



目解析」や、国立がん研究センターの浜本隆二医療AI研究開発分野長による「実臨床応用を目的とした人工知能研究：ビッグデータを活用したデータ駆動型の医学研究」についての講演もありました。

本学大学院医学系研究科からは「AISMECにおけるシステム医学と医用AIの展開」などについて講演がありました。

令和5年

10月16日(月)・11月15日(水) **アウェアネスカラーライトアップを実施**



グリーンリボンデー



ゴールドリボンデー

「アウェアネスカラー」とは、社会運動に関するシンボルカラーを装着したり、建造物をシンボルカラーにライトアップしたりすることでその運動に対する支援・賛同の意思を示す色のことです。本院ではアウェアネスカラーライトアップへの取り組みとして、A棟1階オーディトリウムにライトアップ用のモニュメントを設置しました。

臓器移植法が施行された10月16日はグリーンリボンデーで、移植医療のシンボルカラーであるグリーンにライトアップしました。世界COPDデーである11月15日には、COPD啓発のシンボルカラ

ーであるゴールドにライトアップしました。

また、11月17日(金)～18日(土)には岡山大学の取り組みの一環に賛同し、子宮頸がん検診の受診啓発とHPVワクチンの正しい知識の理解促進を目指して世界保健機構(WHO)が主催する「子宮頸がん撲滅 世界一斉イルミネーション」に合わせたティールブルーにライトアップしました。

オーディトリウムのモニュメントは、今後もさまざまなリボンデーに合わせて多彩な色に変化します。

令和5年

11月9日(木) **こどもの病気についての座談会を開催**

山陽小野田市子育て支援センター スマイルキッズで『こどもの病気についての座談会 ～アレルギーと感染症についてお医者さんに聞



いてみませんか～』を開催しました。会では山口労災病院小児科部長の田代紀陸先生、すながわこどもクリニック院長の砂川新平先生、本院小児科 長谷川俊史教授の3名が、子どもの発熱時にウイルス検査をする際の適切なタイミングやワクチン接種、食物アレルギーの注意点などをテーマにトークを行いました。



その後は希望者を対象に、医師1名につき参加者2名の座談形式で個別相談会を行いました。参加者からは「ちょっとした心配事も相談にのってもらえたので安心した」という声が聞かれました。

令和5年

11月21日(火) **院内図書室が先行リニューアルオープン**

本院C棟1階クロスラウンジの一角に、院内図書室『りぶれいく』が先行リニューアルオープンしました。これは日本出版販売株式会社 × 山口大学経済学部 × 医学部の共同プロジェクトによるもので、経済学部2年生3名が本の選書から本棚のデザイン、ポップの作成までをプロデュースしたものです。『りぶれいく』とはライブラリー(図書室)とブレイク(休憩)を合わせた造語です。

本棚のテーマは「家のような安心感」。患者さんが家族や友人と家でリラックスしているような気持ちで過ごしてほしいという願いを込めて、子どもから年配の方まで年齢を問わず幅広い層に楽しめるものが選書されています。

院内図書室『りぶれいく』はどなたでも自由に利用できますので、ぜひお楽しみください。





Congratulations!



湯尻俊昭教授 国民健康保険関係功績者 厚生労働大臣表彰を受賞

大学院医学系研究科保健学専攻病態検査学講座の湯尻俊昭教授が、令和5年度国民健康保険関係功績者厚生労働大臣表彰を受賞しました。これは、国民健康保険事業に対する功績が顕著である関係役職員に贈られるものです。湯尻教授は18年以上の長きにわたり、本院での診療や本学での研究・教育業務と並行し、山口県国民健康保険診療報酬審査委員会の委員として精勤されました。

受賞を受け、湯尻教授は「県ごとに微妙に異なる保険診療に対する見解を極力平準化し、地域によって審査の判断に差異がないよう尽力してまいりました。委員の活動を通し、医師の視点とは異なる新たな視点で医療について検討できるようになり、私自身も大きな収穫がありました」と話されました。



石黒旭代助教 日本臨床検査医学会 学会賞優秀論文賞を受賞

大学院医学系研究科医学専攻臨床検査・腫瘍学講座の石黒旭代助教が、日本臨床検査医学会において、2023年学会賞優秀論文賞を受賞しました。

優秀論文賞は、毎年日本臨床検査医学会誌に掲載された論文の中から優れた発表に授与されます。論文の題目は、「卵巣腫瘍および子宮内膜症におけるCA125、HE4、ROMAの有用性（日本臨床検査医学会誌 70巻5号）」です。

くわしくは、こちらをご覧ください。→



令和5年

12月8日(金)

災害に関する研修会を開催



看護部災害対策ワーキンググループの主催による「災害に関する研修会」を開催しました。講師に宮城学院女子大学教育学部教育学科の鈴木由美教授を迎え、2011年の東日本大震災をどう乗り越えたかについて講演がありました。当時、鈴木教授は東北大学病院の副看護部長であり、震災直後の大学病院の混乱状況や院内の備蓄物が役に立ったこと、逆に不足したものなどについて話されました。

予測不可能な災害に備え、多職種が協力して訓練する必要性を再確認し、研修会で学んだことを今後の災害対策に取り入れていきます。



山口大学大学院 医学系研究科
器官病態内科学講座 教授

佐野 元昭

令和5年12月1日付で大学院医学系研究科器官病態内科学講座の教授を拝命いたしました佐野元昭（さの・もとあき）と申します。これまで20年間、慶應義塾大学医学部循環器内科学教室で臨床、教育、研究の経験を積んでまいりましたが、新しい環境でさらに成長できればと思っております。

私は、心血管腎代謝疾患の病態生理の解明をめざして、臓器連関の視点から俯瞰した研究を展開してまいりました。加齢とともに癌や心血管疾患、糖尿病、自己免疫性疾患の発症頻度が増加してきますが、その背景には免疫老化（Tリンパ球の細胞老化）と呼ばれる現象が存在します。免疫老化は、Tリンパ球全体の機能劣化が原因ではなく、加齢とともに細胞老化したT細胞が蓄積していき、その割合が増加していくことよって、正常なTリンパ球が劣勢となることが原因で、結果的に、

獲得免疫機能の低下（感染に対する抵抗力の低下、発がんリスクの増大）、炎症性素因の増大（動脈硬化、糖尿病）、自己免疫応答の増大が引き起こされま

す。私は、内臓脂肪型肥満が免疫老化を加速させる現象を発見し、細胞老化したTリンパ球の選択的排除によって、加齢や肥満に伴う心血管腎代謝疾患の発症を抑制できる可能性をマウスで示しました。

トランスレーショナル研究では、心臓や脳の虚血再灌流障害に対して抑制効果を示す水素ガスの医療用ガスとしての薬事承認と実装化をめざして、臨床・非臨床一体型の研究を展開してまいりました。この領域の第一人者として、山口大学を拠点として産学連携を推進させ、心血管領域から腎臓領域、膠原病領域まで、水素ガスを活用した研究の幅を広げていきたいと考えております。

山口大学器官病態内科学の伝統を継承し、同門会（飛翔会）との絆を大切にしながら、講座と山口大学の未来を支える多様な能力・スキルを持った教育者の育成・確保に向けて精一杯尽力する所存です。不慣れな点もあるかと思いますが、何卒よろしく願い申し上げます。

令和5年

12月15日

山口東京理科大学薬学部と医学部が連携協定を締結

このたび、山陽小野田市立山口東京理科大学薬学部と本学医学部は、チーム医療を実践できる優れた医療人を養成し、地域の健康・医療・福祉の発展に寄与するため、両学部の教育資源を活用した「多職種連携教育プログラム」を令和6年度から共同実施することになりました。

12月25日（月）、医学部本館6階会議室において連携協定式を執り行い、篠田晃医学部長と、山陽小野田市立山口東京理科大学の武田健薬学部長が協定書への署名を行いました。

国立大学医学部と公立大学薬学部による多職種連携教育は全国で初の取り組みで、今後は医師、薬剤師、看護師、保健師、臨床検査技師を目指す2校の学生計360人が、両キャンパスを相互に利用しながら、全8回のプログラムの中でグループディスカッションや課題解決型の教育を通しチーム医療を学んでいきます。



令和5年

11月1日(水)～4日(土) 保健学科生6名が国際交流APAHLフォーラムに参加

令和5年11月1日(水)～4日(土)の4日間、医学部保健学科2～3年生6名が、香港大学でのAPAHLフォーラムに参加しました。APAHLとはアジア・太平洋地域における看護・健康科学のリーダーとなる人材の育成を目指した国際連携事業です。本学医学部保健学科のほか、タイのチェンマイ大学とマヒドン大学、中国・香港の香港大学が参加し、年に一度、各大学の持ち回りでフォーラムを開催しています。今回は香港大学がホスト校となり、教職員を含めた約40名で開催されました。



期間中はWHOが提唱する「健康的な高齢化の10年」の中から3つのテーマに基づいて、各国の文化的な背景や事情を共有しながらグループ別のディスカッションを



行ったり、現地の高齢者施設などを見学したりして有意義な4日間を過ごしました。

山口大学医学部ではAPAHLの活動を通して、世界で活躍する医療人の育成に力を入れています。

医学部生の多岐にわたる活躍を紹介

Close UP! 未来の医療人

第46回 日本生体医工学会 中国四国支部大会 若手研究奨励賞受賞 医学部4年生 才川優輔(さいかわ・ゆうすけ)さん

10月28日(土)、第46回日本生体医工学会中国四国支部大会が開催され、医学部4年生の才川優輔さんが若手研究奨励賞を受賞しました。才川さんは、医学部システムバイオインフォマティクス講座において2022年に自己開発コースを履修し、現在も引き続き同講座でAI技術を用いたデータ解析の研究をしています。

受賞の演題は、同講座の浅井義之教授らとの共同研究による『造血幹細胞移植後急性GVHDの悪化リスク予測と予測因子の抽出』です。才川さんは「これまで一般的には行われていなかった医療データの時系列解析を同研究で行い、時間的な変化に着目した点が評価されたのではないかと。受賞できたことは素直にうれしい」と話していました。



才川優輔さん



大内田優月さん

特別国民体育大会 国体栄誉賞受賞

医学部5年生 大内田優月(おうちだ・ゆづき)さん

医学部5年生の大内田優月さんが、令和5年10月に鹿児島県で行われた特別国民体育大会ラグビーフットボールの山口県代表で出場しました。山口県は4位になり、令和5年11月に山口県より特別国民体育大会国体栄誉賞を授与されました。

小学1年生から家族の影響でラグビーを始め、チームの司令塔であるスタンドオフや攻撃の起点となるスクラムハーフとして活躍しています。現在は山口県長門市の社会人女子ラグビーチーム「ながとブルーエンジェルス」にも所属し、医学部生の勉強と部活のラグビー、社会人チームのラグビーと、どの場面にも全力投球で取り組んでいます。今後ますますの活躍が期待されます。

研究紹介

山口大学おもしろプロジェクト 「山口県農産品からつくる新医薬品 ー山口から世界へー」



山口大学の学生が自主的に企画・運営を行う「山口大学おもしろプロジェクト」。今回は、活動グループの一つ『山口県農産品からつくる新医薬品ー山口から世界へー』の研究について紹介します。



左から木村綾佑さん、杉山尚平さん、泉本真志さん



同研究は本学医学部医学科5年生の木村綾佑（きむら・りょうすけ）さんが代表を務め、5年生の泉本真志（いずもと・まさし）さん、杉山尚平（すぎやま・しょうへい）さんが主要メンバーとして活動しています。木村さんは自己開発コースで山口

県光市産のグリーンバナナの皮の成分から口腔がん細胞の増殖を抑える作用があることを発見。ほかの農産物でも調べてみよう、と、同プロジェクトの仲間とともに山口県産の農産品の中から医学的に有用な成分の探索を続けてきました。これまでに宇部市の特産品である小野茶をはじめ、約100種類の農産品から200を超えるサンプルを調整しました。その結果、青パパイヤ、自然薯、ユリの茎の3つのサンプルに口腔がん細胞の抑制と正常細胞のモデルであるヒト上皮角化細胞を増殖させる働きを発見。その中からとくに有効性が顕著で高い安全性を示した青パパイヤを原料に、ヘルスケア商品の開発を行うなどの研究を続けています。「この研究結果により、口腔がんの手術後の再発防止と創傷部位の早期治癒を高める可能性が示唆されます。それにより、がん患者さんの術後のQOLを高める効果が期待されます」と、木村さん。

同プロジェクトの研究は、宇部市SDGs 私たちの未来共創補助金の対象として採択されたほか、2023年度山口大学学長賞を受賞されました。

今後の研究で山口県産の農産品から新医薬品が誕生することを期待しています。

お知らせ Information

「耳鼻咽喉科」の診療科名を「耳鼻咽喉科・頭頸部外科」へ変更しました

令和5年12月1日より、「耳鼻咽喉科」の診療科名を「耳鼻咽喉科・頭頸部外科」へ変更しました。これまで、「耳鼻咽喉科」で担当した疾患は「耳鼻咽喉科・頭頸部外科」で診療しており、診療体制、内容には変更ありません。

変更：耳鼻咽喉科 → 耳鼻咽喉科・頭頸部外科



公式FacebookとInstagramで
山大医学部・病院の情報を発信中



Facebook



Instagram

企画発行 山口大学医学部広報委員会 / 山口大学医学部総務課広報・国際係
〒755-8505 山口県宇部市南小串一丁目1番1号 TEL 0836-22-2111
医学部 <https://www.yamaguchi-u.ac.jp/med/>
附属病院 <http://www.hosp.yamaguchi-u.ac.jp/>